

編集後記

▼四六号四七号は『子ども百科』でした。四八号をおおくりします。

▼特集「新潟県の高校のゆくえ」は激変する高校教育を簡潔にまとめています。これまで普通高校・職業高校のふたつに大別されていた高校に新しく総合高校（総合学科）ができました。総合学科は高校進学時に進路をきめないですむという利点があります。しかし、この学科はまだ条件が整えられていないという議論があります。会員諸氏のご意見を誌上で交流したいと思いました。

▼アンケートを頼りに「にいがたの高校生の家庭・学校生活」の実態と意識を探りました。高校生には自分の家庭の実態が見えにくくなっている状況があること、また校種によって高校生の学校生活への評価がひどく違います。「規則」で縛り「点数」だけで評価することへの批判にどう応えるかが課題です。

▼教育財政セミナーは好評でした。「政府の教育財政セミナーは好評でした。政府の「世の中の役に立つために学ぶ」という健全な人間形成への道を著しくゆがめているとい

う三輪氏の指摘が、エリート官僚・政治家の腐敗が毎日報道される中で妙に実感できました。欧米のすすんだ学資援助・奨学金制度に「経済大国日本」が追い付くための大運動が必要ですよ。

▼「親の目・子どもの目」のなかで野中氏は次のことを紹介しています。レイチャル・カーソン「生まれつきをなわっている子ども」の「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちがずんでいる世界のよるこび、感激、神秘などを子どもたちといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばに必要があります。「これは我が家への問いかけに聞こえました。三歳の孫はいま車と昆虫に夢中です。彼の頭の中はミニカーの名と昆虫の名が毎日せめぎあって右脳を占拠しようとしています。

▼「子育て百科」の感想はみなさんの子育てやお仕事にかかわったそれぞれユニークなものでした。会員のみなさんの感想を今後もお寄せください。（本田）

▼小林昭三氏の論考は、社会問題化している若者の「理科ばなれ」に迫っています。和澄利男氏の調査でわかるように、理科教育における学校の貧困がその基盤にあります。

▼野中昌法氏の論考は、「理科ばなれ」が生まれてくる要因を、幼い子どもとのかかわりのなから明らかにし、親の見識や家庭教育の重要性を訴えています。

▼向俊秀子氏の論考は、現場の教員の目から「長岡の人材教育」とはなにかに迫り、人材教育が標榜する「米百俵」の精神が、いかに真実の「米百俵」から離反しているかがわかります。資料とあわせてみていただければ幸いです。（吉田）

にいがたの教育情報 No. 48

1996年11月30日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。

12月21日～1月8日まで冬期休業致します。